

食の多様性と文化の盛衰

羽生 淳子

もともとジョン・アートルさんが私の教え子で、私は主となる指導教員ではなかったのですが、博士論文の審査には加わっておりまして、その縁で今回は呼んで頂きました。今日は知った顔もぱらぱらとあって、様々なディスカッションができればと思っています。

私のメインの所属は、サンフランシスコ近くの街にあるカリフォルニア大学バークレー校という大学なのですが、現在は京都にある総合地球環境学研究所、地球研と呼んでいるのですが、そこで3年間の年限のプロジェクトを運営しております。プロジェクトを行うには所属を地球研に移さないといけないということで、バークレーの方は2年間のお休みをもらって、地球研にいます。とは言いまして、一月半か二ヶ月に一回はアメリカと日本を行ったり来たりしています。

私の以前の研究を知っている方はご存知かと思うのですが、私は考古学以外、何もできない人間です。かなり歴史を遡りますが、一番最初の発掘は1969年、横浜市下田西貝塚というところですよ。私の家は日吉の近くだったのですが、そのあたりに大規模な開発がたくさん入っている時代でした。ご近所の方が、ガレージの改築をした時に貝層が見えていまして、それを見つけた私の母が、近くに住んでいた明治大学の考古の1年生で、現在は奈良文化財研究所にいらっしゃる松村恵司さんのところに、こんなものが出ています、とお知らせしました。その時に、その遺跡の簡単な発掘に連れて行ってもらったのが最初です。

1960年代後半から70年代初めというのは、東京近郊で遺跡がたくさん破壊されました。家の近くにあった中駒遺跡もその典型的な例で、非常に大きな縄文中期の遺跡だったと思いますが、集落跡が、丸々ひとつ、ブルドーザーで破

*下部にある註は吉田泰幸による

3年間の年限のプロジェクト 「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性：歴史生態学からのアプローチ」(2014～2016年度)が正

式名称、通称「小規模経済プロジェクト」

URL: <http://www.chikyu.ac.jp/fooddiversity/>

壊されました。私はそこに毎日のように通って、縄文土器を拾って、松村さんのところに持って行きました。のちにこの遺跡については、東大の今村啓爾先生と松村さんがお二人で、考古学雑誌に論文を書かれました（今村・松村 1971）。

高校1年生から大学院1年生までは、岩手の九年橋遺跡の発掘に行きました。それから、慶応大学の港区・伊皿子貝塚の発掘にも参加しました。当時の私は、こうした発掘から、とても影響を受けまして、最初は縄文土器を拾うのが楽しかったのですが、特に伊皿子貝塚の発掘の後に、考古学とは、遺物を拾うだけではなくて、いろんなことができる学問だ、というのが見えてきました。

当時、慶応で私の指導教授をしてくださった鈴木公雄先生が新しいことをやりたいということで、江戸時代の遺跡を発掘しました。長岡藩牧野家のお墓だったのですが、これは大学が組織的に江戸時代の遺跡を発掘した比較的早い例です。ここを発掘した時には、私の同級生はかなり懐疑的で、江戸時代のお墓は遺跡ではない、だから発掘してはいけない、と言ったりしましたが、今となっては江戸時代の遺跡を掘るのは、一般的になっています。

この後、私は、3年半にわたりまして、東京大学の構内遺跡の発掘をしました。前田家のお屋敷の跡だったのですが、面白い遺跡で、古九谷だと言われている磁器を分析したら、実は伊万里産だったというようなこともありました。非常に楽しかったのですが、私はやはり縄文時代をやりたくて考古学者になりたいと思ったので、一生、江戸時代のお茶碗を扱うのでは、ちょっと寂しいなと思っておりました。そんな時に、機会がありまして、カナダのマッギル大学(McGill University)に行つて博士課程に入りました。マッギルでは、北極圏の発掘に連れて行ってもらう機会がありました。

その後、縁があってカリフォルニア大学のパークレー校で1996年から教えています。ここは文化人類学と考古学が中心となる学科で、現在25名の教員がいます。カリフォルニア大学に行つてからは、私は学生を連れて、青森県三内丸山遺跡や、その近くの合子沢松森遺跡でフィールドスクールを行つて、小規模な発掘やサンプリングをしました。

何が言いたいかと言いますと、小学校4年生から今まで、考古学をずっとやってきましたが、最初の頃は、一体これは何になるんだろう、なんてことは考え

今村啓爾 (いまむら・けいじ) 縄文時代の考古学のほか、東南アジアの銅鼓研究でも知られる。英語での日本列島先史時代の概説書として、“Prehistoric Japan: New Perspective on Insular East Asia” (Imamura 1996) がある。

伊皿子貝塚 東京都港区の縄文後期を中心とする貝塚。大量の貝層に比較して人口遺物の出土は少なく、ハイガイの貝殻成長線分析では採取時期が春季に集中する。貝層の総量計算、それに基づく総カロリー・タンパク質量計算など、貝塚調査法に影響を与えた。

ずに始めました。ところが、特にカリフォルニア大学バークレー校に行ってから、人類学の先生たちに、考古学というのは、現代社会の中で積極的な役割を果たさうんだということを言われて、その関係を考えなさいと励ましてもらいました。

戦後の日本の考古学は、皆さんご存知かと思いますが、ある意味で、緊急発掘とともに成長してきました。緊急発掘数の増加の結果、1996年には緊急発掘が11,738件という数になっています。学術調査の数は300～400件ぐらいでずっと変わらずにきています。2011年には緊急発掘の件数は7,300件あまりまで落ち込んでいまして、発掘の数は確実に減っています。しかも、数が減っているだけではなくて、規模も小さくなっています。緊急発掘調査費用の推移を見ますと、97年は1,300億円あまりだったのが、2011年には半分以下になっています。このような傾向自体は必ずしも悪いわけではないのですが、緊急発掘に伴ってたくさんの遺跡が発掘されている、そして新しい発見があるというところで伸びてきた日本の考古学はこれからどうするのだろうと考えると、明らかに転機だろうと思います。

もう一つ、発掘が減っているということは、埋蔵文化財担当の専門職員も減ってきているということです。この数の減り方は費用の減少ほどではないのですが、若い方の発掘担当者や、教育委員会での就職口というのは確実に減ってきています。つまり、日本の考古学をこれからどうするかということや、皆で真剣に考える時期に来ています。良くも悪くも、戦後の日本考古学の歴史は開発と裏表であって、1970年から80年代にかけて、遺跡が壊されてしまうから発掘しなくてはいけない、いろんなことは考えなくてはいけないけれど、まずは発掘しようという時代からは変わって来ておりまして、そういった中で考古学と現代社会との関連というのを、もう一度考え直す時期に来ていると思います。

ちょっと話が戻りますが、私が縄文時代の研究課題として、特にカナダに行つて以降、ずっと追いかけてきたのは、定住の問題、それから定住度の決め手の一つとなる生業の多様性の問題です。アメリカの環境人類学の分野では、定住は、食や生業の多様性と不可分の関係にあると、ずっと言われてきました。狩猟採集民考古学では、定住の問題を考える場合、移動度の高い狩猟採集民と、

緊急発掘数の増加の結果、1996年には緊急発掘が11,738件という数になっています 文化庁による埋蔵文化財関係統計資料による。数年おきに発表され、現時点での最新版は平成28(2016)年3月。以下のリンク先のPDFで緊急発掘件数(11頁)、学術調査件数(同)、緊急発掘調査費用

(23頁)、専門職員数(3頁)の推移を見ることができる。

URL: http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/pdf/h28_03_maizotokei.pdf

移動度の低い狩猟採集民という分け方があります。狩猟採集民と言っても様々な人々がいる中で、一般に、色々なものを食べている食の多様性が高い採集民は移動度が高くなりがちであるのに対して、移動度の低い採集民は食の多様性が低く、主食がある、というように考えて頂ければと思います。この考え方は、ビンフォードが1980年代に出したフォーレジャー・コレクター・モデル(Forager / Collector Model)に影響を受けています。

移動度の高い狩猟採集民というのは、基本的にどこに行っても食べ物がある状態と考えてください。つまり、歩行距離で2時間、直線距離で10km程度の家の周りにある食べ物を採集して、食べて、周りのものを食べ尽くしてしまったら、次のところに移るので、無理に貯蔵する必要がありません。言ってみれば、南の島で、どこに行っても果物がなっているようなイメージです。私はこれをキリギリス型、あるいはジェネラリスト型と呼んでいるのですが、貯蔵しないで、労力の投下が最小限ですむというこのような生業形態ですと、一箇所にいる時間は比較的短いので、居住地の遺跡は小さくなります。それから、周りで食料をとったところも、小さな遺跡になりますから、考古学的には非常に単純なシステムになります。移動度が高いと言うと、惨めな感じがするかもしれませんが、どこに行っても食べ物があるので、労力の投下が少なく楽な暮らしができるというのが、移動性の高い狩猟採集民ということです。ただ、これができる場所は非常に限られていて、資源の地域的な分布や季節的な変化が少ない地域でのみ可能です。

日本の大部分をはじめとする温帯地域では、季節的な変化が激しいので、冬、食べ物がない時にどうやって暮らすかが問題になります。また、川でサケが取れるところや、どんぐりの木がたくさん集まっているところは空間的に均質に分布しているわけではないので、キリギリス型では暮らせません。そうすると、限られた場所で食料をたくさんとって貯蔵し、ある程度大きな集落を作って暮らすようになります。一箇所に長く居住するためには2時間の歩行圏内の食料だけでは足りないため、その外まで食べ物を取りに行きます。そして、そこで野営などをして、たくさんの食べ物を取り、持ち帰って貯蔵します。貯蔵が開始されると、一箇所により長くいることが可能になります。しかし、より長く

ビンフォード Lewis Roberts Binford
プロセス考古学の代表的研究者。考古学的痕跡のパターンを解釈するために狩猟採集民の行動戦略などを調査する民族考古学的研究を行った。

Forager / Collector Model Foragerは拠点
的キャンプと一時的キャンプからなる単純な居住

システムで、拠点的キャンプの移動を頻繁に行うため各キャンプの規模は小さく、Collectorは拠点的キャンプの周りの資源を計画的に開発することで拠点的キャンプの規模も大きくなるというモデル。羽生氏は前者をキリギリス(ジェネラリスト)型、後者をアリ(スペシャリスト)型と要約している。

いるというのはそれだけの労力投下があるわけで、実は一人一人の労力としての効率は悪いシステムです。そういったシステムの場合、秋冬の集落で貯蔵する、冬が越せて春になると別のところに移動し、春から夏先にかけては食べ物の取りやすいところにまた別の集落を作ります。夏の後半になると移動的になって核家族のように散らばって小さな集落を作り、しばらく暮らすとまた秋冬の集落に戻ってくるというような形になります。私はこれをアリ型あるいはスペシャリスト型と呼んでいます。定住度が高いから文化が進んでいると、つい思ってしまいますが、労力の効率としては実はよくありません。

これは狩猟採集民のモデルですが、2つの差は、狩猟採集民に限らず、環境をどういった形で使うかという違いであり、どちらのタイプが進んでいるというものではないと思っています。人々が一箇所に長く留まるようになり、その集落が大きくなって、都市になって、それに従って、物品、特に食べ物の長距離輸送が増えてくるといった抽象的なレベルで考えますと、現代の大都市というのは、アリ型の究極の形ではないかと考えています。こういったモデルをもとにして、私の博士論文では、縄文時代前期の定住度の問題、生業活動、社会的な不平等、人口規模といった変数がどのように関係しているのかについて検討しました。

私のやっていることは今も基本的に変わっておらず、20年経っても同じことをやっていると思われるかもしれませんが、変化したところもいくつかあります。一つは、かつては定住を含めた Mobility（移動性）を研究の中心に据えていたのですが、Mobility に最も影響を与えるのは、「食・生業の多様性」ではないかと考え、今は多様性をモデルの図の中央に据えています (Fig. 4.1.1)。私が今、一番関心を持っているのがこの三角形の図の中心部ということです。

こう考えると、定住度と生業の多様性は、ジェネラリスト型とスペシャリス

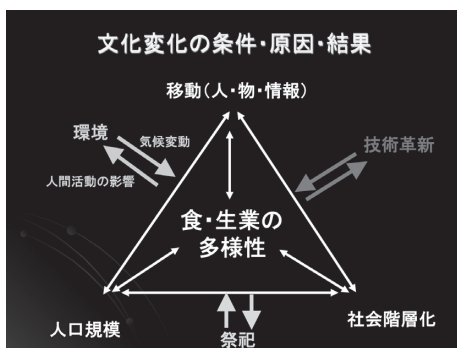


Fig. 4.1.1 文化の長期変化の原因・条件・結果

ト型の対比でもそうでしたが、環境に対する適応の仕方の違いということになります。さらに、人間が生業活動を始めると、今度はそれが環境にも影響を与えますので、図の中の矢印は両方向になります。その他にどのような要素が影響を与えるかと考えますと、テクノロジー、たとえば土器の使用が全体のシステムにどのように影響を与えたか、また、新しいタイプの石

器が出てくると、どのような形で全体のバランスが変わってくるのか、というような技術革新も非常に大事です。なぜシステムが変わるのだろうと考えた時に、環境変化を重視して、気候変動があったからシステムが変わったという説明がよくされます。しかし、一番大事なのは社会階層化の問題ではないか、つまりシステムを変えることによって得をする人たちがいて、その人たちがシステムを変えるにあたって大きな役割を果たしたのではないかと考えることも可能です。

定住度は人口規模とも関係します。そして、人口規模は、食料生産の規模と密接に関係しています。さらに、環境や機能以外に、お祭りや宗教も重要になってきます。そこで、このような色々な要素の関係を、どういう形で縄文時代の遺跡から考えていけるかということをお話したいと思います。

縄文時代の考古学は、データが揃っているため、短期から長期にわたる人間と環境の相互関係の変化を考える上で絶好の機会を与えてくれます。縄文時代には、一つ大きな謎があります。この図 (Fig. 4.1.2) は小山修三先生が1980年代初めに集計したデータから作ったのですが、縄文時代中期に、遺跡の数から見ても、規模から見ても一番のピークが集中します。ですから、推定人口数を求めると、縄文時代中期が一番大きくなり、後期と晩期はそれより少なくなります。これはもちろん色々な仮定に基づいている値なので、この数値自体が信頼できるかと言われると、変わってくることはあると思います。ただ、大きな傾向としては、中期に大きな遺跡が多く、遺跡数も多いということは言えます。さらに言いますと、大きな遺跡が集中しているのは、北日本から中部地方にかけての地域が中心で、縄文時代中期の推定人口数が大きくなっているのは、この地域に中期の大きい遺跡が多いことからきています。この地域の縄文時代中期の遺跡からは、私たちが打製石斧と呼んでいる、土

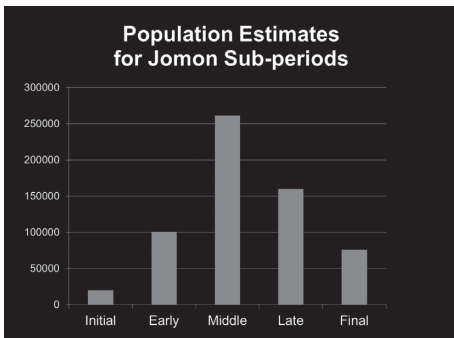


Fig. 4.1.2 縄文時代の時期別人口推計

小山修三先生が1980年代初めに集計したデータ『縄文時代：コンピュータ考古学による復元』（小山1984）所収のデータ。縄文時代の人口推計研究は、これ以降、まとまったものはない。羽

生氏も述べているように、この推計は様々な仮定に基づいているが、推計の手順や問題点等は同書の「第1章 縄文時代の人口」（同：10-39）参照。

掘り具と思われる道具や、磨石と呼ばれている植物などの加工具が大量に出ています。特に磨石はナッツ類をすりつぶしたりするのに使われたと考える研究者が多くいます。

これらの特徴から考えると、食の多様性と文化の長期的持続性を考える時に、北東北の縄文時代前期から中期の事例は役に立つ事例ではないかと思っています。今、私が地球研ではじめているプロジェクトでは、考古学が三分の一を占めていますが、縄文時代前期から中期における文化変化のメカニズムを検討して、その結果を通じて、文化の長期的な持続性に関する本格的な考古学的研究の貢献を考えようとしています。

その時に鍵になるのが、青森県の三内丸山遺跡という、みなさんもお存知の遺跡です。この遺跡は約 5,900 年前、縄文時代前期の中頃から始まって、中期の終わりまで続いた遺跡です。この遺跡の場所は、野球場になるはずでした。しかし発掘によって、野球場になるはずだった地区全域が大きな縄文時代の遺跡であることがわかりました。さらに、その外にまで遺跡が広がっていることもわかって、現在、国の指定の史跡となり、今、世界遺産登録に向けて取り組んでいる縄文遺跡群の核となっています。私は、97 年の夏からここでサンプリングをさせて頂いていましたが、この遺跡について、重要なことは、1,000 年以上にわたって居住されていて、時間的な変化が大きいということです。始まるの 5,900 年前は、円筒下層 a 式期と呼ばれている時期です。これは土器型式の名前なのですが、時代としては円筒下層の a、b、c、d 式期、それからの縄文時代の中期になって上層 a 式期、b、c、d、e、榎林、最花、大木 10 式期と全部で 12 型式期に分かれます。縄文時代の中の時期は、基本的に土器の模様や形をもとにして決めています。土器が一片でもあれば、どの時期のものであるかがわかります。そして、その土器に伴っている放射性炭素年代を付き合わせて、だいたいこのくらいの年代だろうというのを決めていくわけです。

1990 年代の終わりから 2000 年代にかけて、多くの研究者の方がこの遺跡が消滅した理由について、議論を重ねてきました。一つ有力な説として、たくさんの方がおっしゃっているのは、縄文時代中期の終わりは、寒冷化が起こった時期であり、気候が寒くなった時期にこの遺跡も終わっているのです。寒冷化が直接の原因ではないかということです。確かに、海底コアの分析に基づいた気温の変化との関係を見ると、寒冷化と遺跡の終わりがだいたい一致していると言いたくなる気持ちはわかります。しかし、よく考えてみますと、気候が寒くなったから遺跡での居住が終わった、あるいは人口が減った、というのは説明としては説得力がありません。一体どういうメカニズムを経てそうなったのかということ、気候変化との関係を考える場合でも言う必要があります。もう一つ、遺跡の居住が終わった年代について、放射性炭素年代のデータがしっ

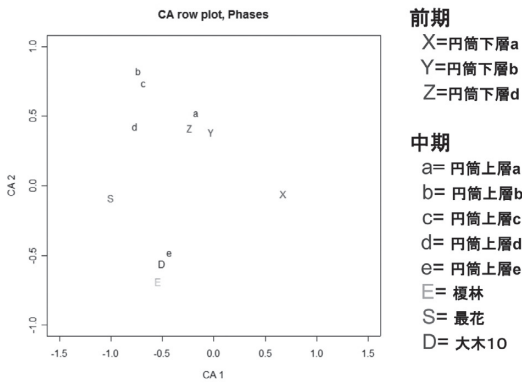


Fig. 4. 1. 3 石器組成データのコレスポネンス分析

前期

- X=円筒下層a
- Y=円筒下層b
- Z=円筒下層d

中期

- a=円筒上層a
- b=円筒上層b
- c=円筒上層c
- d=円筒上層d
- e=円筒上層e
- E=榎林
- S=最花
- D=大木10

かりしていないので、さらに調べる必要があります。

三内丸山遺跡については発掘調査報告書が順次刊行されていますので、そのデータを見ながら、まず石器に注目してみました。鏃（やじり）ですとか、石のナイフ、先ほどお話した磨石と呼ばれる食べ物をつぶす道具などの割合が、三内丸山の場合には、はっきり

変化しています。この図（Fig. 4.1.3）に示した多変量解析では、X・Y・Zは縄文時代前期の資料、aが中期初めの円筒上層 a 式期の資料です。そのあとの中期前半の円筒上層 b～d 式期はグラフの上方にまとまり、中期中頃から後半の上層 e 式期、榎林式期、大木 10 式期はグラフの下方に来ていて、最花式だけ少し前に戻りますが、全体としてはきれいな U の字形になっています。石器組成のデータを多変量解析にかけて、このようなパターンが出るということは、石器組成の変化に、一定の法則があるということです。具体的にはこういった変化が見られるのかと言いますと、磨石と呼ばれる植物質の加工具が前期の後半ぐらいから徐々に増えてきて、中期の前半になると、磨石が石器組成の中心となる時期があります。それが円筒上層 d 式期までで、その直後に磨石がほとんど出なくなりまして、半分以上が石鏃だけになってしまいます。今述べたパターンを図式化しますと、最初は石匙と呼ばれていますナイフや剥片石器類が中心となる石器組成で、徐々に磨石が増えてきて、上層 b～d 式期になると、半分以上が磨石になります。上層 d と e 式期の間で石器組成が大きく変わりまして、磨石がほとんど出なくなり、最後は石鏃が主体になります、最花式期だけ少し戻るのはですが、大きく言うと、そうした変化があります。

さらに面白いのは、三内丸山遺跡は大遺跡だと言われていますが、時期ごとに住居の数を数えてみますと、住居が多い時期は限られています。まず下層 d 式期に最初のピークがあり、それから上層 d・e 式期が最大のピークです。大きな流れで見ると、三内丸山遺跡の規模は徐々に大きくなり、上層 d・e 式を最大のピークとして榎林式期から衰退に向かうという波の形で捉えることができます。石器組成が変わるところ（上層 d から e 式期への変化）が、住居の数が減る時期（上層 e から榎林式期への変化）よりも先に来ています。また、祭祀の道具と一般的に言われている土偶の数を見てみると、これがたくさん出る

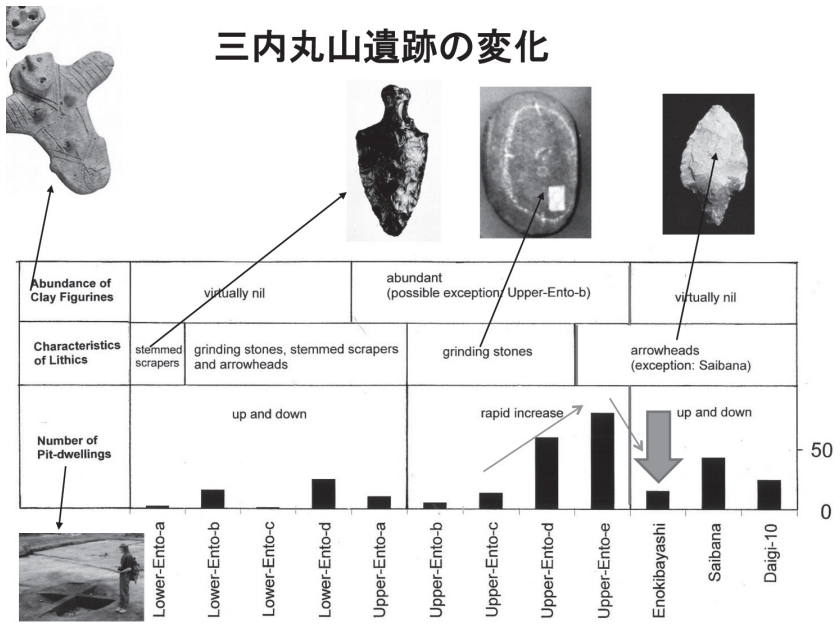


Fig. 4.1.4 三内丸山遺跡の変遷

時期は上層 a 式期から e 式期に限られます。石器組成を生業の多様性を測る指標としてみた場合、もともとは色々な石器を使っていたのに磨石主体になってしまうという時期があるということから、生業の専門化、つまり多様性の喪失が起こった、と考えることができます。なぜそういったことが起こったのだろうかと考えると、磨石は植物質の食料をすりつぶす道具とされているので、植物質食料への依存を示すとする仮説が立てられます。ここから、特定の食料への過度な依存が続いたために、システムが崩壊し人口支持力が減少したという可能性が考えられます。生業が変わったのは円筒上層 d 式期の終わりぐらい、その後で少し遅れて住居の数が減るのが上層 e 式期の終わり頃、続く榎林式期以降には集落の規模が減少し、それに伴って土偶の数も減少して祭祀も変わったと解釈できます。これらのデータから考えると、生業と食の多様性の喪失が最初に起こり、そのあとで集落や祭祀の変化が生じたのではないか、という仮説を立てることができます (Fig. 4.1.4)。

ここで紹介したのは三内丸山遺跡の事例ですが、青森県全体で見ても、似たような石器組成の変化や住居址数の変化があります。特に、青森平野近辺ではその傾向が顕著です。このような変化は、縄文中期文化の盛衰と関連づけて考えられるのではないかと思います。もちろんこれはきわめて単純化した話でして、実際には、三内丸山は複雑な遺跡なので、遺跡の機能変化をこれに重ね合わせる必要がありますが、大きな流れとしては間違っていないと考えています。

研究として次に行うべきことの一つは、年代の物差しを整備して絶対年代を押さえることです。さらに、食の多様性の喪失と磨石の増加を結びつけるのであれば、磨石は一体何に使われたのか、植物質の主食があったか、あるいは主食でなくても植物質食料に偏っていったというパターンがあったのか、そうだとしたらどのような考古資料からそれが裏付けられるのか、ということを考える必要があります。加えて必要なのが、気候変動のデータです。今は花粉分析でかなり細かなところまでデータは出ていますが、花粉は人為的な環境変化で左右されるので、他の指標も必要です。気候変動がどのような形で集落・生業のパターンと関わってくるのか、逆に大きな遺跡ができてくることによって、どのような環境の変化があったのか、双方向の考察が必要です。

また、今までの話では人口が減るところに議論の焦点が集中していますが、それ以前の問題として、どうして生業の集約化が起こったのかも考える必要があります。縄文中期全体については、歴史的な発展という説明がよくされますが、発展だとするとなぜその時期に起こったのかという説明が不足しているわけで、それを考えるためには、縄文時代前期後半くらいからの考古資料を総合的に見ていく必要があります。特に、私が興味を持って見ているのは、縄文社会の階層化についてで、これについて、もう一度、中期の初めか前期の終わりから考え直してもいいのではないかと思います。

縄文時代前期後半・中期初めくらいから、土壌のフローテーションをしますと、ウルシ科の炭化果実が多く出てくるようになります。ウルシ工芸は、日本文化の中で縄文時代まで遡る、数少ない要素の一つです。そのウルシの果実が、中期のはじめあたりから多く出るようになります。この時期に、工芸製品、つまり木製品・ウルシ製品や土器などを製作する専門集団が出現した可能性も含めて、社会階層化の可能性をもう一度考え直してもいいのではないかと思います。縄文時代の後・晩期については、しばしば社会階層化の問題が議論されますが、すでに前期の後半には、お墓に副葬品が増えてきたり、お祭り用の小型の土器が作られたり、社会的に変わった要素が出てきはじめます。それらをもう一度見直すべきではと考えています。

現在、私たちのプロジェクトでは、放射性炭素年代測定に基づく絶対年代の再検討と土器編年との対応関係の検討、気候と植生変化を示す資料の分析、具体的には遺跡内外の低湿地と海底コアに含まれている花粉、植物珪酸体、珪藻

縄文時代の後・晩期については、しばしば社会階層化の問題が議論されます 縄文時代の階層化社会論は、特に『縄文式階層化社会論』（渡辺 1990）以降活発化する。縄文時代後期および晩

期は東北日本において精製土器と粗製土器の分化、環状列石などのモニュメントの構築が目立つため、階層化社会論の舞台となることが多かった。

などの分析、さらに食べ物と生業の研究として、ミクロとマクロの動植物遺存体の研究、土器の残存脂肪酸の分析、人骨の炭素・窒素の安定同位体比による海産物と陸産物の食の比率の変化、それから青森県内における遺跡分布の変化、遺跡の機能差の研究などを行っています。大きな意味では、人為的な生態系と文化景観が長期的にどう変わったのかというテーマを立てて、研究をしています。

三内丸山遺跡とその周辺の遺跡の研究は、環境と人間との相互関係、それから食の多様性の喪失がどのような形で人の文化や人口に影響を与えるのかを考えるのに適した事例だと思っています。

先ほどの三角形の図 (Fig. 4.1.1) は、考古学の研究者には違和感なく見てもらえると思うのですが、一步下がって、考古の話ではなくて、現代の話だと考えてみてください。今の環境問題というと、多様性の喪失、特に食べ物の多様性が減ってきて困っているという話が、国連機関などからも出ています。食べ物の多様性が減ると何が困るのか、例えばお米について考えてみましょう。今、日本で食べられているお米の 80% 以上が、コシヒカリか、その子孫だそうです。美味しいので、皆、いいことだと思っているのですが、もしもコシヒカリに対する病虫害や、都合の悪い環境変化が起こると、日本の 80% 以上のお米がとれないという事態が突然起こる可能性があります。これが 1960 年代よりも前ですと、日本には色々なお米のバラエティがありました。一つのタイプがダメでも他のものが残るといような仕組みがありました。そういう意味で食べ物の多様性、生業の多様性、作り方の多様性、作られたものの多様性というのは、私たちのシステムを脆弱なものにしないために非常に重要なことです。

飢饉というものは、気温が上がらなかったから今年も飢饉、早魃だから飢饉という風に小説を読むと出てきますが、早魃、低温自体が原因ではなくて、一つのものだけを作っていた時に、その作物に都合の悪い気候の変化が起こったから飢饉になった例が多いと思います。典型的な例は、アイルランドの「じゃがいも飢饉」です。この話は複雑で、じゃがいもはほとんど輸出していたという話もあるのですが、基本的には、一つのものだけを作るというのは非常に危険なやり方です。

このような意味で、私の続けてきた狩猟採集民研究は、環境を考える人類学

アイルランドの「じゃがいも飢饉」 19 世紀中頃の
アイルランドでじゃがいも不作が原因となった
飢饉。羽生氏も述べているように、これがじゃがいもへの依存が高すぎたためと考えるか、じゃが

いもの輸出先であったイングランドやスコットランドの政策面の失敗など、社会的要因の方が強いと考えるかは議論がある。

全般に貢献できる分野ではないかと考えています。特に、考古学の場合は様々な時空間のスケールを扱えますので、何年かのオーダーで見ていたらうまくいっているようであっても、何百年というオーダーで見るとうまく機能しなくなる例が、恐らく数多くあると思います。

現代の食や環境の問題を考えている人は、大体、ターゲットが2050年前後だと思うのですが、たとえ2050年や2100年までうまくいったとしても、その後うまくいかないシステムでは困ります。長い時間幅を扱う考古学は、その意味で大きな利点を持つ学問だと思います。

ジャレド・ダイヤモンドというアメリカの有名な研究者の書いた『文明崩壊』という非常に売れた本がありますが、この中では気候変動と環境被害の問題がかなり単純化された話になっています。それをもう少ししっかりとしたデータで押さえて、同じようなことを議論できればよいと考えています。ダイヤモンドがトップダウンだとすると、考古学はボトムアップの議論ができるデータを持っている学問分野です。過去からの教訓と現代が直面する課題を考える環境人類学の一分野として、狩猟採集民の環境管理といったことを考古学から考えていけるのではないかと思います。

文化の長期変化については、私たちは、どうしても人類の歴史は右肩上がり、未来はバラ色と考えがちなのですが、歴史的变化は本当にいいことばかりだったのか、いわゆる進歩と言われているものが本当に進歩なのか、進化という生物学的な考え方で見た時に本当に次につながるものなのか、それらの問いを考える時に、多様性という概念は重要です。多様性の喪失と均質化が、もし今起こっているとすれば何が原因なのかといった疑問が出てきます。これらの問いを考える時に、縄文時代の資料は大事な役割を果たすことが可能です。

もう一度、現代のことを考えてみてください。大規模で均質化された現在の食料生産への動きは、現在も進行中です。例えば、遺伝子組み換えで同じ品種のものだけを作る、しかもそれが一つの会社に管理されるということが起こりつつあります。これは一つの動きなのですが、まだその方向に向かってしまうと決まった訳ではありません。遺伝子組み換え食品に限らず、生産コストが「安

ジャレド・ダイヤモンド Jared Diamond
『文明崩壊：滅亡と存続の命運を分けるもの』の他に日本語にも訳されている書物に『銃・病原菌・鉄：1万3000年にわたる人類史の謎』がある。近年の『サピエンス全史』などのビッグヒストリー・ブームの先駆けとも言える存在。

大規模で均質化された現在の食料生産への動き
遺伝子組み換え作物や農薬などのバイオテクノロジーメーカーなどによって主導される動き。生産性の高い遺伝子組換え品種と自社農薬とのセット販売の手法や強引なシェア拡大による搾取の企業慣行、自社化学薬品の有毒性の隠蔽など、倫理面で批判を受けることが多く、この動きに対して世界各地で反対デモが起きている。

い」食品をたくさん作ろうとしている人たちの言い分は、その方が安い、そして今は世界で飢えかかっている人たちが多くいるのだから、まずは食料増産することが大事であるという論の進め方です。しかし、一步下がって見ると、そうしたシステムは短期的には大量な生産量を確保できるかもしれないが、多様性をなくしてしまったら、50年先、100年先にはどうなるのだろう、特に気候変動や天災による被害はどのようになるだろう、環境へのダメージはどのようになるだろう、といったことを真剣に考える時期に来ていると思います。遺伝子組み換えの食品は安いと言われていますが、これも計算の仕方によれば決して安くはないという研究者もいます。さらに、世界の人口のうち、たくさんの人が飢えているという話についても、食料を大量に作ればその問題は解決されるのかという見方もあります。食料は十分に足りているが、一部の富裕層が独り占めしている結果として食料がうまく行き渡っていない、つまり、これは分配の不平等という問題なので、社会的な不平等を解決しなくては、食料問題は解決しない、つまり食料生産量の問題ではないという研究者もいます。こうした議論と、私が紹介した縄文時代の事例は、遠く離れているように見えるかもしれませんが、根底のところを考えると、どういった時に多様性が減るのか、そうすることによって得するのは誰なのか、長期的な視点で考えたときにどういったダメージがあるのか、という視点から見ると、実は同じ問題を扱っているのではないかと考えています。

大規模な食料生産の弊害というのは現代に特有のものではなくて、昔からあったと思います。ただ一つ違うのは、現代のシステムはグローバルなシステムで全部繋がっている点です。昔でしたら、一つのシステムが機能しなくても代替りのシステムが周りに多くあった訳ですが、今のグローバル・システムがトラブルに陥ったときには、一つのもがダメになると全世界のもがダメになってしまう可能性があるということです。いずれにしても、現代の問題を考える際に、考古学から得られた知見、それから考古学から考えた長期的なスパンという視点の利点を、もっと強調してもいいのではないかと思います。

それでは、最後に簡単にまとめます。大規模な食料生産や流通の問題点は、私たちは直感的には分かっていたかと思いますが、実感として得られたのは、2011年3月11日の東日本大震災の後ではないかと思っています。私の実家の鎌倉近くの生協では、まずお米がなくなって、パンがなくなって、お野菜がなくなって、豆腐がなくなって、缶詰がなくなって、果てはトイレットペーパーまでが、3月14日には全部なくなりました。このような事態になってしまうと、輸入すれば大丈夫だと言っている、輸入待ちでは当座のしのぎにもなりません。4日間で、大都市圏の食べ物がなくなってしまう危険性があるのです。今回の

大震災は、色々な意味で本当にひどいことでしたが、更にひどい状況にもなり得たということです。生産・流通・消費システムの複雑性は必ず脆弱性を伴っており、持続可能性を考えた場合にはマイナスであるという考えは一般論としては分かって頂けるかと思います。しかし、実際には大きな問題は起こらない、大丈夫だ、と仮定していたものが、大震災の経験を経て、このままでは大丈夫ではないと考える人が徐々に増えて来ているように思います。

このような視点に立って、現在、私は、地球研の「地域に根ざした小規模経済活動の長期的持続可能性」というプロジェクトを進めています。プロジェクトの三分の一は考古、三分の一は民族・社会調査、残りの三分の一がそれらの成果を元にした実践普及研究です。研究の理論的枠組みは歴史生態学、つまり、環境管理も含めて人間が環境に与える影響を重視する学問分野です。歴史生態学では、過去の経済社会システムの歴史は世界各地で多様であり、一元的に進むものではなかったという点を強調します。日本の縄文時代は、土器を持つ狩猟採集民として世界史の中の例外と言われて来ましたが、例外ではなくて、各地の歴史が、それぞれ世界に一つだけと考えるのもいいのではないかと思います。また、歴史生態学では、短期から長期までの様々な時間的変化を扱います。ですから、このプロジェクトでは、色々なタイムスパンから見た、人間と環境との相互関係の解明に取り組んでいます。

このプロジェクトでは、北日本と、北米の北西海岸とカリフォルニアを含む西海岸との比較調査・研究活動をしています。後者の地域では、縄文時代中期と違って、極端な人口減少は知られていません。これについて、北米の研究者は、多様な食料獲得活動が順調に機能していたからだと言っています。北米の考古データは、まだきめが粗いので、実際に見始めるともっと人口の変化が見つかる可能性もありますが、縄文時代との比較を行うには良い資料であると考えています。

先ほど、私は考古学しかできないと申し上げましたが、最近は考古学以外にも、現代の事例研究として、北アメリカ先住民のコミュニティや、小規模な農家のフィールド調査も行っています。先週は、福島県内で小規模太陽光発電や地熱発電をしている方々のところにインタビューに行って来ました。インタビューで色々な方のお話をうかがっていると、世の中がどちらに動こうとしているのかということを考えさせられます。そして、縄文時代を研究している考古学者として何が言えるのかを考えさせられます。

先月には、日本学術振興会が主催者となってくれまして、バークレーで、過去と現在の小規模な経済活動に関するシンポジウムを開催しました。その時に、農業生態学の先生が、せっかくこのように様々な分野の人が集まったのだから、鍵になるコンセプトを考えようと提案して下さいました。そこで、さま

さまざまなキーワードの候補が出てきたのですが、ただの研究のキーワードではなく、これから未来の社会がどうなって欲しいかという積極的なビジョンを示すキーワードをいくつか決めようという話になりました。まず出てきたのが、Diversity（多様性）。次が Network（ネットワーク）。この二つは問題なかったのですが、三番目の候補である Decentralization（非中央集権化）が議論になりまして、最終的には、まだ決まっていません。Local Autonomy、地方自治といえますか、地方分権といえますか、先住民族の場合ですと、Sovereignty（主権）という概念も含めて、中央政府からのトップダウンだけでない、地域の活性化も見据えたキーワードとしての三番目をどうするか検討中です。いずれにしても、これからそういった社会が成り立っていかないと、人類の未来は非常に厳しいのではと、たくさんの研究者が考え始めています。

私がこういう話をすると、特に考古学のプロパーの学会では、何を言っているのだろう、と驚いた顔をされることが多くあります。しかし、長期的な視野に立って地球規模の視野に立った発言ができるのが考古学の強みだと考えます。

冒頭に申し上げたように、戦後の考古学は、緊急発掘とともに進んできた学問です。つまり、開発が減ってしまうと発掘も減る、発掘が減ると行政発掘に関わる人の就職口も減るということです。では、発掘が多ければいいのか、開発が多ければいいのかということも、もちろんそうではありません。1970～80年代には、緊急発掘をせざるを得ないという状況がありました。しかし、近年では、徐々に、発掘しないで済むものでしたら保存しましょうという事例も増えてきています。

今まで、環境保護と経済成長は両極にあるものと考えがちでしたが、本来、経済成長というものには色々な形があり、一元的なものではありません。特に、大規模で均質な生産活動に対して、小規模で多様な生産活動の重要性をもっと真剣に考える形で様々な分野の人が意見を言い始めてもいいのではないかと思います。今日紹介しました縄文時代の事例や、考古学と現代社会との関わりを含めて、現代の社会・環境問題とは全然違うように見えるものが、実はつながっているのだということを発信できる形で、これから研究を進めていければと思っています。